

## 特集 ファンタジーの猫

猫 このやわらかき神秘。

屋根があれば登り、木枝に鳥が来れば追いかける。何もすることがないときは木陰で昼寝をする。役に立つことは、何もしない。猫の手は借りられないのである。けれど、その自由さとしなやかなぬくもりは、何ものにも代えがたい。

一方、猫といえば犬。犬は猫と並んで代表的なペットである。飼い主に忠実で頼れる存在である犬と、気ままで自由奔放な猫。人の好みはそれぞれだが、歴史をさかのぼれば、ミアキスという共通の祖先から分かれたものだという。樹上生活から草原に出ていったのが犬で、森に残ったのが猫である。それぞれがそれぞれのやり方で人と寄り添い、人の心を豊かにしてくれたよき相棒だ。

思えば、猫とネズミのつき合いは長い。本来、家猫の役目は、ネズミの害から穀物や蚕・本を守るということであった。しかも、ネズミの害を防ぐ「一罰百戒」の才能は抜群だ。ただその辺りを散歩しているだけで、ネズミは逃げていくのだから。猫にとってのネズミは、宿敵であり、また永遠のライバルでもある。アニメーション映画の『トムとジェリー』のような楽しい物語がうまれるのも不思議ではない。

それでは、ライバルのネズミ「子」も相棒の犬「戌」も干支に入っているというのに、何故に「猫」は入っていないのか？ 大きな疑問である。しかしながら、日本の「俳句歳時記」を開いてみると、「猫」は堂々と参加している。そこに、ネズミも犬もいない。やはり、猫は人にとって身近な存在なのである。「猫」は、人と自然の中でいきいきと作品に詠みこまれている。

猫の子がちょいと押へるおち葉哉（一茶）

猫と人が紡いできた長い時間のみちのり。ある日、猫はふわりと日常から浮きあがり、物語の世界にもぐりこむ。猫は、作家の心の扉をノックして…どのような作品を書かせたのだろうか。猫は、いつもさりげなく人の心の扉を開けて通りぬけていく。

（間中ケイ子）

